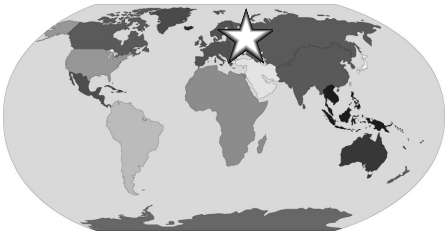

ロシア ：「対極」の世界から（1）

～「挑戦する姿勢」から辿り着いたロシア ～

ロシア連邦・サンクトペテルスブルグ国立大学留学中
服部　祐也

初回である今回は、学生時代のアメリカ留学で培った「挑戦する姿勢の大切さ」によって、私がロシア留学に至った経緯、そしてこれまでのロシアの印象についてご紹介させて頂きます。

私は 2009 年 8 月より企業のロシア語研修生として、ロシア・サンクトペテルブルク国立大学でロシア語を学習中です。

ご存じの通り、ロシアは政治的にも経済的にも世界有数の大国です。チャイコフスキーやドストエフスキー等、優れた文化人を輩出した国としても有名です。一方で、日本やアメリカにおいて、ロシアはとかくわかり辛い国という印象があり、ネガティブなイメージすら持たれてしまっているのが現状ではないでしょうか。

そこで本連載では、いわゆる「西側」出身の私がロシアやロシア人についてどう感じ、どう考えたかについてご報告させて頂こうと思います。

1、「挑戦する姿勢」から辿り着いたロシア

（1）アメリカ留学で体得した「挑戦する姿勢」

2005 年 9 月から 2006 年 6 月までの 9 ヶ月間、私は早稲田大学の交換留学プログラムで California Polytechnic State University San Luis Obispo に留学しました。今までの私の 25 年間の人生を振り返った時、今の自分に最も大きな影響を及ぼしたものはこの留学であると断言できます。

その留学で体得した一番大きなもの、それは「挑戦する姿勢の大切さ」です。失敗を恐れて何もしなければ、何も得る事は出来ない。しかし、自分に鞭を打ってものごとに挑戦すれば、たとえ失敗したとしても、必ず何かを得る事が出来る。私がアメリカ留学中に悩み、苦しんだ末に至った結論です。（詳細は本誌 No.5 から No.10 をご参照下さい。）

アメリカ留学後、体得した「挑戦する姿勢」を以って様々な事に挑戦してきました。その中で、人生最大の挑戦をしたのが、カメルーンへのインターンシップでした。

（2）カメルーン・インターンシップ ～コミュニケーションツールとしての言語の必要性～

2008 年 1 月から 3 月までの 2 ヶ月間、私はカメルーンの Reach Out という女性のエンパワーメント、孤児・寡婦への教育・栄養面のサポートをする NGO でインターンシップをしました。カメルーンで一番強く感じた事、それは「人々に選択肢（機会）が無い、もしくは非常に限られている」、そしてそれこそが、「貧困」であると定義できるのではないかという事です。長い間自分の長期的な目標の一つとして漠然と「貧困削減に何らかの形で寄与する」というものを持っていましたが、その様な選択肢の無い、もしくは限られている人々に選択肢を提供する事で貧困削減に寄与しよう、と目標を具体化する事が出来ました。（詳細は本誌 No.20 をご参照下さい。）

同時にコミュニケーションをする上での言語の大切さも痛感しました。

私がインターンシップをしていた Buea という地域の公用語は英語ですが、現地の人が話す言葉はそれとは程遠い pidgin English です。私に接する時に彼らが話す“英語”はこの pidgin English に強く影響されます。私に対して気遣って色々話してくれるのに、何度聞き返しても彼らの言っている事がわからない事が多々ありました。申し訳無さからわかった振りをしたところ「わからないのにわかった振りはしないでくれ」と言われてしまった事もありました。そこで何とか彼らとのコミュニケーションを図る為、私は現地語である pidgin English を覚え使ってみたところ、誰もが皆喜んでくれたのでした。NGO にはアメリカ人もインターン中だったのですが、ある時彼らは「彼女の方が英語は出来るけど pidgin を話そうとはしない。でも Yuya は pidgin を話してくれる。」と僕に話したのです。私はここで初めて現地語の重要性を感じました。

人と人とが解り合うためにはコミュニケーションが必要ですが、そのコミュニケーションの大部分を占めるのが言語でしょう。現地語で話す事はその土地の人々・文化への敬意を表す事にもつながり、現地人の本当の気持ちを聞き出す為には、現地語を使いこなせる必要がある。自分の目標の一つである選択肢の提供を行う際、彼らの母国語で生の声を聞かなければ、本当の意味での貢献はできない。そう考え、当時就職内定者であった私は現在の企業の配属希望を「第一志望：語学研修生」とし、提出しました。

服部君の前のエッセイは、下のサイトでお読みになれます。
www.infoe.com/IMZ/WASEDA/WSD-List-1.htm